

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	浅見 祐香 (あさみ ゆか)
所属・資格 (※学生の場合は課程・学年を記載)	人間科学研究科・博士後期課程 2 年
発表年月 または事業開催年月	2021 年 10 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本犯罪心理学会第 59 回大会・オンライン開催
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	浅見祐香, 野村和孝, 嶋田洋徳
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	再犯リスク尺度 Inventory of Offender Risk, Needs, and Strengths (IORNS) 日本語版作成の試み
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。) 目的: 近年, わが国において, 刑法犯の認知件数が減少する中で, 相対的に再犯者率が上昇しており, 再犯・再非行防止に向けた体系的な支援の充実化が課題となっている (法務総合研究所, 2016)。再犯・再非行防止対策については, Risk-Need-Responsivity (RNR) モデルに基づき, 再犯リスクの高さに応じた処遇が効果的であるとされており (Bonta & Andrews, 2017), 海外では, 一般犯罪者を対象とした LS/CMI (Andrews et al., 2004) や COMPAS (Northpointe Institute for Public Management, 1996) などが活用されている。しかしながら, これらのリスクアセスメントツールは, 半構造化された面接や臨床的手法による情報の収集, 評定という方法が主であるため, 実施者のトレーニングの必要性や, 時間的制約などの実施上の困難さが指摘されている (三浦他, 2020)。そのため, 自記式の質問紙法によるリスクアセスメントツールの有用性が指摘されており, 海外においては, Miller (2006) が Inventory Offender Risk, Needs, and Strengths (IORNS) を開発し, 十分な信頼性と妥当性を示している。そこで本研究では, IORNS 日本語版を作成し, その妥当性の予備的な検討を行うことを目的とする。 方法: 参加者 更生保護施設入所者 52 名を対象にデータを収集し, IORNS の項目に記入漏れがない 40 名のうち, Miller (2006) と同様に, Inconsistent Response Style が 5 点以上であった 2 名, Favorable Impression が 8 点以上であった 8 名を除外した計 30 名 (男性 18 名, 女性 12 名; 平均年齢 46.7 ± 14.3 歳) を分析対象とした。 調査材料 デモグラフィック 年齢, 性別, 配偶者の有無, 犯罪歴, 精神疾患の有無, 最終学歴, 職業形態への回答を求めた。 IORNS IORNS 日本語版の作成は, 原著者の許諾を得たうえで, 著者が翻訳を行い, 調整を加えた。さらに, 専門分野の翻訳業者に委託して逆翻訳を実施し, 原著者から原版の項目と日本語版の項目が対応していることの確認が得られた。IORNS は, 130 項目で構成される自記式の質問紙であり, 一般成人の犯罪者に対するアセスメントと支援における Static Risk Index (静的リスク), Dynamic Need Index (動的リスク), Protective Strength Index (保護要因) を測定することを目的として開発された (Miller, 2006)。動的リスクは, サイコパシー, アルコール・薬物問題, 攻撃性など 6 の下位尺度, 保護要因は, 個人資源と環境資源の下位尺度で構成されている。	

犯罪リスク要因 (a) 反社会的傾向 : JCTI (Kishi et al., 2015), (b) サイコパシー : 日本語版一次・二次性サイコパシー尺度 (大隈他, 2007), (c) 薬物依存 : DAST-20 (嶋根他, 2015), (d) 攻撃性 : BAQ (安藤他, 1999), (e) 反社会パーソナリティ傾向 : PDQ-R (APD) (切池・松永, 1995), (f) 境界性パーソナリティ傾向 : PDQ-R (BPD) を使用した。

情動障害 (a) 抑うつ : CES-D (島他, 1985), (b) 不安 : STAI (岩本他, 1989) を使用した。

手続き 本研究参加へのインフォームド・コンセントが得られた者から回答を求めた。IORS 日本語版の総得点, 静的リスク, 動的リスク, 保護要因と各尺度の関連性, 動的リスクの下位尺度と再犯リスク要因との関連性をピアソンの相関分析によって検討した。なお, 本研究は, 「早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された。

結果: IORS 日本語版の総得点と JCTI, BAQ, PDQ-R (APD) との間に中程度の正の相関 ($r = .59-.63$, $p < .01$), 動的リスクと JCTI, 日本語版一次・二次性サイコパシー尺度, DAST-20, BAQ, PDQ-R (BPD, APD) との間に中程度の正の相関 ($r = .43-.64$, $p < .05$) が確認された。また, IORS 日本語版の動的リスクの下位尺度に関しては, サイコパシーと日本語版一次・二次性サイコパシー尺度との間に中程度の正の相関 ($r = .55$, $p < .01$), アルコール・薬物問題と DAST-20 との間に高い正の相関 ($r = .73$, $p < .01$), 攻撃性と BAQ との間に中程度の正の相関 ($r = .62$, $p < .01$) が示された。さらに, IORS 日本語版の動的リスクに関して, CES-D との間に弱い正の相関 ($r = .38$, $p < .05$), STAI (state) との間に弱い正の相関傾向 ($r = .36$, $p < .10$), STAI (trait) との間に中程度の正の相関 ($r = .55$, $p < .01$) が確認された。また, IORS 日本語版の保護要因に関して, CES-D と STAI (trait) との間に中程度の負の相関 (いずれも $r = -.40$, $p < .05$) が確認された。

考察 : IORS 日本語版は, 原版と同様に, 反社会的あるいは攻撃的な行動傾向との間に関連があることが示唆されたとともに, 動的リスクの下位尺度であるサイコパシー, アルコール・薬物問題, 攻撃性においては, 類似の構成概念との間に関連があることが明らかにされた。さらに, IORS 日本語版の動的リスクが高いほど, 高い抑うつや不安を経験しており, 保護要因の高さは抑うつや不安の低さと関連があることが示唆された。以上のことから, IORS 日本語版は, 原版 IORS と同様に一定の高さの妥当性を有すると考えられる。そのため, 簡便な自記式の質問紙によるリスクアセスメントツールとして, 有用な尺度となりうることが明らかにされた。

※無断転載禁止